

『臆病者はラブドールに抱かれる』

著：中嶋ジロウ

ill：minato.Bob

距離を詰めた由良の、俺を見下ろす目が細められる。

さっきまであどけないような笑顔を浮かべていたはずなのに、急にオスっぽい、妖しげな表情を浮かべている。

俺はどっと心臓が跳ねたのを悟られまいとして口を噤んで、視線を逸らした。

「ねえ、さっき布団干してたよね。外から見えちゃった。……俺で遊ぶために準備してたんでしょ？」
由良の骨ばった手が俺の肩に伸びてきたかと思うと、乱暴ではなくそっと窺うように掴まれた。

思わず大袈裟に体が震えてしまったけど、由良は離れずに、親指の腹で俺の着たカットソーの縫い目を微かに撫でただけだ。

「――あ、……う」

確かに、由良の言う通りだ。

俺は届いたらすぐにオナニーできるように土曜日の夕方に配送指定して、布団も干しておいた。何ならそのまま日曜日でもベッドの中で過ごすと思ってレトルト食品だって完備してあるし、この数日オナ禁していたくらいだ。

「ねえ、冬森さん。俺で遊んでよ。……いいでしょ？俺のこと、おもちゃにしていいから――……」

「う、うるさい……っちょっと、黙、」

妙に低く響くようになった由良の声に抗うように俺が声を荒げると、不意に目の前が暗くなった。

あっと声を上げる間もない。

掴まれた肩をやんわりと引き寄せるだけで、由良は俺の顔を覗き込んで唇を押し付けていた。――俺の唇に。

「っ……あ、ちょ……っ待」

慌てて身を振って逃れようとする、容易に離れる。無理強いするつもりはないんだ。

いや、そもそも人形なら無理強いもできないんだから――そういうことか。

「俺を黙らせるには、キスすればいいんだよ。冬森さん」

ちょっと唇を柔らかく食まれただけで初めてキスをした子供みたいに心臓を暴れさせている俺に、由良が再び顔を寄せてくる。

掠れた声を紡ぐたびに吐息はかかるけれど、由良から口付けてはこない。

「――……っ」

知らずのうちに由良は俺に擦り寄るように体を寄せていて、互いの衣服越しにさえ体温が伝わってくるようだ。

他人の体温がすぐ間近にあると思うと、恐怖心とも緊張ともつかない気持ちで胸が締め付けられてくる。

「ねえ、冬森さん――……」

俺の肩に頭を預けようとしているのかと思うほど顔を傾けて覗き込んでくる由良が切なげな声で俺の名前を繰り返そうとした時、俺はぎゅうっと目を瞑った。

俺は人形を買ったんだ。

俺の好みにどんぴしゃの顔をした、人間と見間違うほど精巧ですごい機能を持ったラブドールだ。

本人がそう言うんだから、それでいいんだ。

俺は自分にそう言い聞かせて、目の前の唇に噛み付くようにキスをした。

身を屈めた由良の胸のシャツを握り締めて、半ばやけくそで引き寄せる。

目を瞑っていたからわからないけど、由良は驚いた素振りすら見せずに少し笑ったような気がした。唇を押し付けていたんだからたぶん気のせいじゃないだろう。

「……っふ、う……」

がむしゃらに噛み付いただけの俺の唇を割って、由良の熱い舌が入ってくる。

緊張で食いしばっていた俺の歯の表面を何度も撫でながら、強張っている俺の体を宥めるように肩を掴んだ手が背中に回ってきた。

もう一方の大きな掌が後頭部に添えられると、思わず気の抜けた俺の歯列を由良が少し強引に割った。

「あ、……っん、んん、……ん」

反射的に顔を背けようとする、由良の指が俺の髪を梳くように撫でた。また、気が抜けそうになる。すぐにいやダメだと思い直して由良のシャツを掴む手に力をこめるけど、別に、何もダメなんてことはないのに。

「……冬森さん」

やんわりと抱き寄せた俺の体を玄関先の壁に預けて、由良の唇が少し離れた。

まだ表情も見えないほど顔は近いまま。鼻先をすり寄せて、顔の向きを変える。

「俺の舌、噛まないでね。精巧にできてるぶん、壊れやすいんだ」

冗談のつもりなのか、由良が小さく笑った。その笑う声さえ濡れた俺の唇を震わせて、心臓に悪い。

すぐにまた由良の唇が吸い付いてきたかと思うと、今度はすぐに舌が入ってきた。

ぎこちなく開いた俺の歯列の奥にある舌を掬い上げて、先端を擦るように舐ってから絡めとっていく。

「.....っふ.....んう、っん.....」

くちゅくちゅと口内で響く粘ついた水音が、頭に響いていく。

アダルトビデオで聞くような唾液の音よりずっと近くて、リアルだ。

由良が舌先を吸い上げ、互いの熱い肉塊を擦り合わせるたびに背筋を舐めていく痺れも、俺が妄想していたものよりずっと抗い難くて、体が自然と反応してしまう。

交わした唾液がとてつもなく甘やかに感じて夢中で嚥下するうちに俺は知らず鼻を鳴らして、由良に舌を伸ばしていた。

「あ、ん.....っう、は.....っ、あ」

由良が顔の向きを変えるたびに唇が離れてしまうのが惜しくて、顎を上げて首を伸ばし、由良の首に腕を回す。

由良は俺の後頭部を強く抱き寄せてそれに応じてくれた。

口内で由良の舌が蠢くたびに自分の頭の中まで舐め回されているようでどうしようもなく体が震える。

どんなにそれを抑えようとしても、由良が俺の唾液を啜るだけで気が抜けてしまう。

舌の表も裏も、歯列も、上顎まで執拗に舐られると俺は完全に蕩けてしまっていた。

「冬森さん、.....、キスおいしいね」

由良の首にしがみついていないとその場に立っていることもできないくらい、体の力が抜けてしまっている。

由良の濡れた唇が微かな声で囁くだけで体の芯がむず痒くなって、体の内側を暴いて欲しいという欲求に突き上げられる。

「う、ん——.....っ由良、」

は、と短く吐き出した息が自分でも驚くほど熱っぽくて、声も甘えたものになっていた。慌てて口を噤もうとすると、それを見透かされたように由良に唇を啄まれた。

「うん」

由良がはにかむように笑う。

まるで、俺がすんでのところで飲み込んだ「もっと」という言葉に答えたように。

無性に気恥ずかしくなった俺が顔を逸らそうとすると、由良がぐっと身を寄せてきた。

背中に壁が当たる。ひどく熱くなってしまった体に壁の冷たさが気持ち良いと感じたのも束の間、覆いかぶさるように体を寄せた由良の膝が俺の力の入らない膝の間に足を入れてきた。

「え、.....っあ、ちょ.....待て」

由良の首に回していた手を外して、下肢に伸ばす。だけど俺の手が届くよりも先に、由良の腿が俺の膨らみを押し上げた。

「——.....っ！」

ガクンと膝が折れて、一度離れた由良の体にしがみつく。

「あ、待て.....って、言っ.....！」

か細い声で抗議しながら、しかし俺の腰は由良の足に刺激を求めるようにひとりで揺れ始めていた。

しがみつくと体も力が入らないけど、由良の腕がしっかり俺を抱きとめていてくれる。俺は目の前の広い胸に顔を埋めて、息を弾ませた。

これはラブドールなんだから、人形の体の一部を使ってオナニーするようなものだ。

——そういえば、恥ずかしいことでも何でも無い。

「あ、.....っい、.....っう、んん.....っ」

「冬森さん、気持ちいい？」

息苦しいくらい俺を強く壁に押し付けた由良が、俺の腰の動きに合わせて緩く脚を突き上げてくる。

俺はビクビクンと腰を跳ね上げさせながら、無意識のうちに高い声を上げていた。

「う、ん.....っきもち、い.....っもっと——.....っもっと、」

由良のシャツに顔を埋めて声を上げていると、ベッドのシーツに頬を押し付けてオナニーしているのと同じような錯覚に襲われる。実際、していることは大して変わらない。

だけど由良からは俺の知らない男の匂いが香り立っていて、しがみついた体も脈打って熱くなっている。

俺は下肢を擦りつけた腿を這い上がるようにして、由良の中心に触れようとした。

「由良、.....っ由良、あっ」

呼び慣れない名前をねだるように口にすると、由良がそれを察したようにぐいと腰を突き出した。と同時に、壁に押し付けていた俺の腰を抱き寄せる。

「ひう、——……っ！」
瞬間、俺の体は意志に関係なく短く痙攣して、壁から引き離された背が仰け反った。
「あ、待っ……、やば、」
仰け反ったせいで上体が離れると、由良がきょとんとした表情で俺を見下ろしていた。
だけど俺の腰を抱き寄せた手はそのままだし——俺が望んだ通り、由良の熱い猛りが俺のものに押し付けられている。
ぶるっと大きなわななきが、俺の背筋を駆けた。
「あ、見——……っ見るな、っ……！」
咄嗟に顔を隠そうとして手を離すと、ただでさえ由良の脚に突き上げられるような格好でまともに立っていなかった俺は大きくぐらついた。
「冬森さん」
倒れそうになった俺を慌てて抱きとめて、由良が目を瞬かせた。
「——……もしかして、イッちゃった？」
由良が膝を下ろして爪先立ちじゃなくなっても、俺は由良の腕を借りていなくては立ってられなくなっていた。

製品版はこちらでお楽しみください。

Kindle

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01D11CHE6/>

Renta!

<http://renta.papy.co.jp/renta/sc/frm/item/98392/>

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>